

# フランスにおける参加型 景域保全計画策定の試み

田中 尚人<sup>1</sup>・シリル マルラン<sup>2</sup>

<sup>1</sup>熊本大学 政策創造研究教育センター 准教授

<sup>2</sup>熊本大学 政策創造研究教育センター 政策研究員

近年我が国でも文化的景観保全等において、変化を許容しながらも、地域固有の景観生成メカニズムを保全する取り組みが実践されている。本研究では、フランスの中央部に位置するAuvergne州にて、マルランたちが策定してきたSite制度を中心とした「人々の暮らしを含んだ景域保全計画」を、日本の文化的景観保全の現状と比較分析し、参加の意義について考察した。この取り組みは、「Atlas Pratique des Paysages d'Auvergne」と名付けられマルランらPaysagisteが主体となったチームが、オーベルニュ州のDREAL（地方環境都市整備施設管理局）から委託された業務であり、ランドスケープシャトルと呼ばれる11人乗りのワゴン車に地域住民とともに乗り込み景域保全地区を巡り、ブログを活用して地域の人々の保全対象となっている地域の風景に関する言葉を紡ぐ、という風景を拠り所とした地域マネジメントの特徴的な取り組みである。

## 1. 研究の背景と目的

### (1) 文化的景観制度

近年、地域固有の歴史や文化を反映した景観を保全する手法として、文化的景観制度が注目を集めている。文化的景観は、2008（平成16）年の文化財保護法の一部改正により始まった新しい文化財保護手法であり、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第二条第1項第五号より）」と定義される。この文化的景観の中でも特に重要なものは、都道府県または市町村の申し出に基づき、国が「重要文化的景観」に選定することができる。

### (2) 景域の保全

歴史的環境を含む景域の保全には、これまでに日本においては、景観、公園、緑地、農林、都市計画、文化財など様々な行政が関与してきた。特に面的な歴史的環境を保全する制度・手法としては、文化財行政における「史跡」「名勝」「伝統的建造物群保存地区」が適用されてきた。文化的景観は、地域固有の歴史、自然環境、生活・生業によって形成されてきた地域景観の本質的価値、言い換えると地域固有の「風景生成メカニズム」の保存が要件とされている。つまり、それぞれの地域において展開されてきた「人々の暮らし」を内包している点に特色がある。景域内に人々が居住していることから、歴史的環境に配慮しつつも、生活・生業のために環境が変化することが認められており、既存の文化財体系とは一線を画する。

### (3) 景域保全における参加の意義

文化的景観は、ユネスコ世界遺産のカテゴリーにも存在し、その「有機的に進化する景観」の中でも「継続中の景観 (continuing landscape)」は、「現在の社会が、その伝統的生活様式の重要性を認め、その活性化に努め、景観の進化が現在も進行しているもの。同時にその時代を越えた進化を顕著にあらわす物理的形跡を展示するもの」と説明されている。歴史的環境に対して現代の人々がその価値を認め、共有し、その創造に努める文化的景観の保全は、地域に住まうことを誇りとする地域住民と、価値の評価・保存・整備を実践する行政（市町村・都道府県・国の各レベルにおいて）との協働の下ではじめて実現する「持続可能なまちづくり」、地域のマネジメントそのものである。

本研究の目的は、フランスの中央部に位置する Auvergne(オーベルニュ)州にて、共同研究者であるマルランたちが策定してきた「人々の暮らしを含んだ景域保全計画」を、日本の文化的景観保全の現状と比較分析し、「参加」の意義について考察することである。故郷の風景の価値を共有することは、地域住民であれ、行政官であれ、専門家であれ、ともに地域に住まい、地域のアイデンティティ醸成に繋がる最も基本的な活動である、と筆者たちは考える。本研究は、2010年9月及び2011年9月の二度、フランスにて実施した資料調査、ヒアリング調査に基づくものである。写真は全て、田中が撮影したものである。

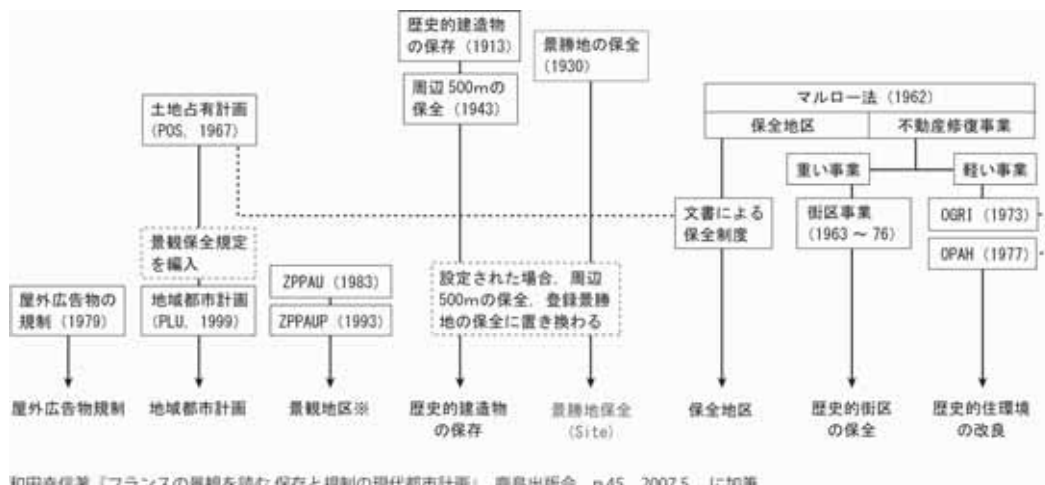
## 2. 景観保全計画の概要

### (1) 景域保全計画の概要

フランスは中央集権が強固な反面、地方主権も進んでおり、行政的には様々なレベルで施策が運用されている。簡単に整理すると、

- ① 国 (Etat) レベル、
- ② 地域圏・州 (Région) レベル：全国に22、
- ③ 県 (Département) レベル：全国に96、
- ④ コミュニュー (Commune) レベル：全国に約36,000、

の4つのレベルが存在する。今回、研究対象とした景域保全計画は、②オーベルニュ州における、主に③HAUTE-LOIRE (オート・ロワール) 県の事例であり、その監督官庁が、DREAL (Direction Régionale de l' Environnement, de l' Aménagement et du Logement：地方環境都市整備施設管理局) である。



和田幸信著「フランスの景観を読む 保存と規制の現代都市計画」、鹿島出版会、p.45、2007.5. に加筆

図一 1 フランスにおける歴史的環境及び景観保全制度の概要

Sité（シット）制度は、1906年「景勝地保護に関する1906年4月21日法」により成立した制度とされている。図-1に示したように、それまで主な保存対象であった記念建造物や工作物に加え、景勝地にまで保護の対象が拡張された。

1930年には「自然景観、景勝地及び学術的民俗的に重要な土地の保護に関する1930年5月2日法」が制定され、天然記念物（monument naturel）及びその他の景勝地リスト、景観地目録（inventaire des sites）が作成された。他の歴史的環境保全制度・手法のほとんどが、文化・コミュニケーション省の担当であるのに対し、シットの主管はエネルギー・持続可能開発・国土整備省（1930年当時は環境省）であり、文化・コミュニケーション省との協議を行う。広域圏レベルではDREALが担当機関となる。シットは、自然・文化・歴史・風景など非常に広範な土地の価値を保護するための制度であると言える。現在、自然環境については、1986年に「自然保護法」が制定され各種公園制度によって保全される部分も大きくなっている。

Atlas Pratique des Paysages d' Auvergne（アトラス・デュ・ペイザージュ）は、図-2に示したオーベルニュ州のDIRENからマルランらPaysagiste（ランドスケープアーキテクト）を中心に編成されたチームに依頼された景域保全計画に対する、彼らの策定方針及び手法である。この取り組みを実践しているチームは、マルランらペイザジスト、地理学者、民俗学者、博物学コンサルタント、そして行政官であるInspecteur des sites（景勝地監視官）や元行政官らによって編成されている。



図-2 Carte des vingt pays d' Auvergne (<http://commons.wikimedia.org/>より)

## (2) 計画策定事業における参加手法

フランスでは、一般的に米国型の「参加（Participation）」的協働手法は取り入れられていないと言われる。しかし、既往文献や筆者の管見では、フランスでは行政と地域住民との政治的な結び付きが強く、官主導ではあるが、行政側は説明責任を全うし明確なビジョンを持った協働の場を設定し、そこに地域住民たちは適切に、より積極的に参加しているように見受けられる。アトラス・デュ・ペイザージュにおいても、風景を共有するための参加手法に工夫が見られたので、以下に説明する。

### 1) ランドスケープシャトル「風景を体験する」(写真-1～写真-4)

マルランらのチームは、これまでも地方都市の景域保全計画などを策定してきたが、その際も①行政官との連携、②地域住民との対話、③専門家である彼らのチームと両者を交えてのピクニック（まち歩き）を実践してきた。しかし、市街地のみならず郊外においても自然環境との調和に配慮しつつ実践されてきた人為もまた、当該地域の固有性を構成する景観要素となる。しかし、長い年月をかけて、あたかも「自然」のように形成されてきた人為環境は、その地域に住まう者にとっては、無意識下の景観と言おうか、気づきにく





写真一 荷台にはピクニック用の椅子と机



写真二 地図は「風景との対話」の道具



写真三 普通の風景の中をまち歩き



写真四 マルランたちのチーム

い対象である。そこで、専門家－非専門家、地域内－地域外、の関係性を超えて、シャトル（11人乗り）に同乗し名もなき場所を訪れ、車を停めてその土地を歩き回り、風景について語り合う、という取り組みが考え出された。この活動自体を、彼らは「ランドスケープシャトル」と呼んでいる。

## 2) ブログ「風景を共有した体験を物語る」(図－3～図－5)

マルランらのチームは、ランドスケープシャトルの体験をブログに綴っている。基本的に、このブログはチーム所目によって編集されているが、地域住民の方々が閲覧することは可能であり、コメントを書き込むこともできる。マルランは、あくまでブログは補助的な装置にしか過ぎないが、風景を共有した体験を「言葉／文字」にすることは意義深いと考えている。また、地域住民の方々からの素朴で誠意ある、長年住んできた者だけが言える言葉も大切であると考えている。最終的に、このブログの内容が編集され、報告書や出版物が作成されるとのことである。

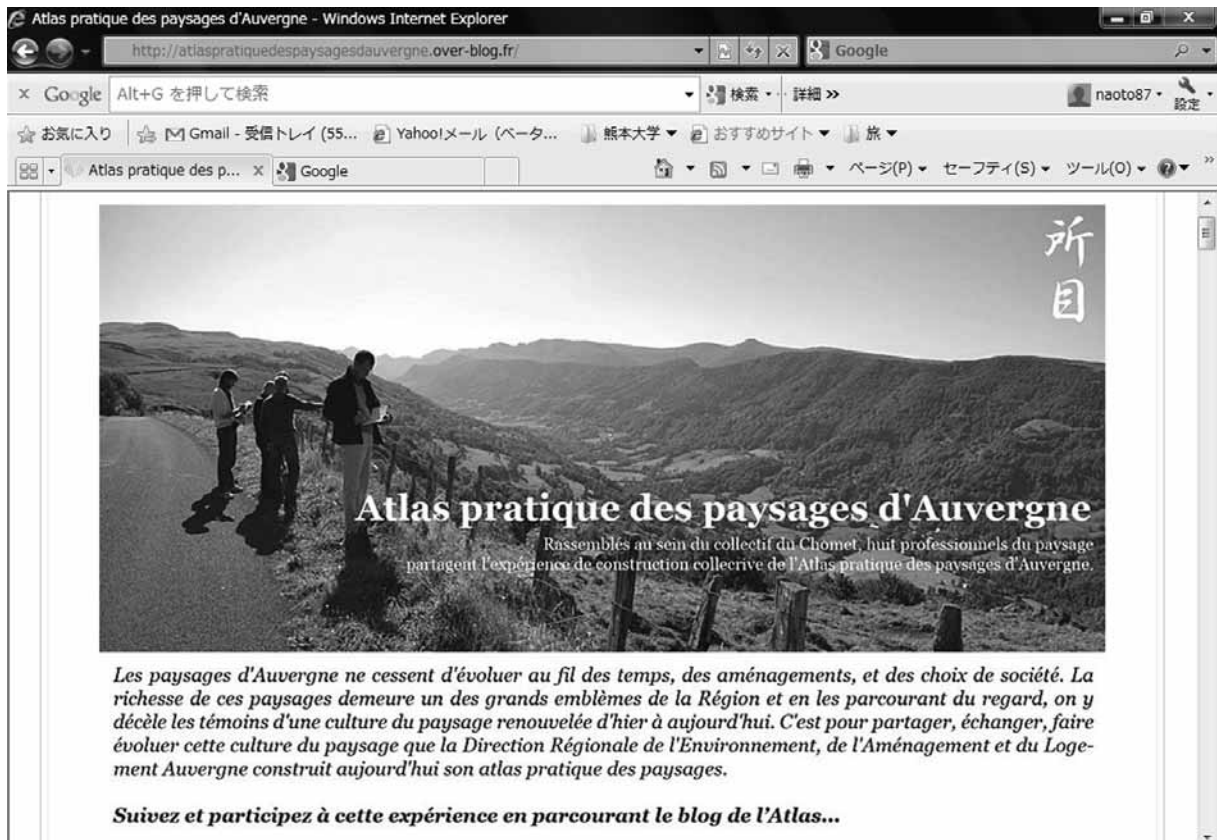


図-3 ブログのトップページ（「所目」はマルランたちのチーム）  
<http://atlaspratiquedespaysagesdauvergne.over-blog.fr/>



図-4 行程が記されたGoogleマップ



図-5 「普通の風景」が記録されたflickr

### 3. Sité 制度と参加を重視したAtlasの特徴

#### (1) Sité制度と現代社会

- ・ Sitéシステムも ATLASの取り組みも、所管が同じDREALである。
- ・ 地域の保全も開発も、景観施策に関係するものであると考えている。
- ・ Sitéには古いSitéと新しいSitéがある。
- ・ 古いSitéは狭い範囲、新しいSitéは広い範囲のものである。
- ・ 新しいSitéは、20年前頃にフランスの様々な変化に対応する為に設定された。
- ・ 新しいSitéは現代のランドスケープの概念に則したものであるが、古いSitéはどちらかと言えば、かつてのピクチャレスク概念に近い。

## (2) Atlasの対象とする領域の大きさと場所

- ・約15年前に、地方圏のDREAL（当時DIREN）は、県レベルでATLASをつくるように言っていたが、現在国が地方圏レベルでATLASをつくるように言っている。
- ・国は、我々に相談する前は「風景の組み合わせ」と呼ばれる、この地方圏を59の部分に分けた地図を作成していた。彼らは、この地図を約360の「風景単位」と呼ばれる単位に分解していた。
- ・私たちが風景について語る時、こんな細かな風景単位などは存在せず、もっと重層的な景観認識が重要であると考えている。
- ・私たちの考えでは、ランドスケープに関する知識はすでに存在しているが、それらを目に見えるように構築することは至難の業である。
- ・だから、私たちは、オーベルニュに住んでいる人々に役立つ、実践的で有益な風景保全の知識を紡ごうとしているのである。

## (3) コミュニティを跨ぐ課題設定について

- ・私たちは、コミュニティの規模を超える問題こそ、地域の景観政策を説明するのに必要な場だと理解している。
- ・新しいタイプのSiteの中にはコミュニティを跨ぐ課題設定が散見され興味深い。
- ・今のフランスでは、この大きさの議論にこそ可能性がある。
- ・最近では、市長やコミュニティ間の調整をする議員によく会うようになった。私たちは、ランドスケープシャトルに乗って、彼らとコミュニティを跨ぐ問題の中にこそ、景観政策の鍵があると議論している。

## (4) ランドスケープシャトルに乗る人々

- ・最初にDREALと一緒に、オーベルニュ州全体でランドスケープに関わって働いている人々の地図を作った。
- ・この地図には、国の機関と地域の共同体やアソシエーションが記載されていた。
- ・私たちはさらに、私たちの知っている、より実践的に、地域のランドスケープに関して働いている人々を加えていった。
- ・しかし、私たちは彼らに無理強いをしていない。希望者だけを招いている。
- ・最後には、私たちはシャトルに乗ってくれる人々を、オーベルニュの「風景と生きる人々」、つまりランドスケープに関する繋がりの一部だと考えるようになった。
- ・私たちは、極めて開かれた形で、オーベルニュにおいてシャトルによる30回の旅をした。最後の10回は、私たちはより深い議論をするために、より専門的に議論できる仲間と旅をした。
- ・例えばコミュニティを跨ぐ地域の市長などとともに、地方圏レベルで起こる様々な問題、開発や農業など、について話し合った。

## (5) Atlasの成果のまとめ方

- ・違う手法によって表現された、二つの成果物となる予定である。
- ・一つは「59の風景の組み合わせ方に関する覚え書き」、もう一つは「マネジメントの



形」というカタログである。オーベルニュのランドスケープシャトルで、私たちが見聞きした内容を編集したものになる。

- ・様々な形で、人々は共同体は、国は地域をつくっている。別の言い方をすれば、地域をつくりながら、人々は本当に様々なことを行っている。
- ・多くの方々は、Atlasの次に来るもの、に期待している。
- ・これら二つの成果物を繋ぐのが地図になる。この地図を注意深くみれば、オーベルニュの風景を理解する鍵が、きっと見つかる。
- ・私たちは、オープンウィキのように、私たちがつくったAtlasに情報を加えたり、加筆するように参加によってどんどん形成されていく、インターネットを媒介としたコンテンツを作りたい。
- ・閉じた知識による、誰も使わないような大きな本ではなく、参加によって成長していくAtlasをつくっていききたい。
- ・将来、オーベルニュでランドスケープに関わる人々にとって、使いやすく有益なものになるように、Atlasを作っていきたい。

#### 4. 景域保全における参加の意義に関する考察

本研究は、「人々の暮らしを含んだ景域保全計画」の先進事例として、フランスにおいて実践されている「アトラス・デュ・ペイザージュ」を取り上げ、その計画策定における参加の意義について考察したものである。平成23年9月21日現在、29件が重要文化的景観に選定されている文化的景観制度に基づく、文化的景観保全の各ステップにおいて重要な示唆を得た。

##### Step-1：評価の段階

専門家による調査や地域住民・行政との協働により価値を発見する

##### Step-2：保全の段階

地域内で価値を共有し、持続可能な保存・活用の方針を決定する

##### Step-3：整備の段階

地域内外に価値を発信し、日常・非日常の生活環境を整備する

風景は、地域の自然／社会環境の総体として、長い年月をかけて積層してきた人為の履歴、眼前に立ち現れた地域の風土＝アイデンティティそのものである。その風景に対して、専門性や地域の内外を問わず、人として対峙し、体験を共有しようとする姿勢、そして掛け替えのない価値あるものとして物語る事が、風景保全における参加の意義である。

謝辞：本研究には、様々な方に協力を頂いており、記して感謝の意を表します。また、下記の研究支援を受けています。

- ・平成22～24年度 科学研究費補助金基盤研究（B）『日仏の事例分析による土木遺産を基盤とした持続可能な農村観光支援システムの開発（研究代表者：小林一郎）』
- ・平成22～23年度 鹿島学術財団研究助成『中山間地における土木遺産・文化的景観を基盤としたツーリズム』

## 【参考文献】

- 1) ル・ピュイ市におけるシット見直し事業に関する研究、田中尚人・シリル=マルラン・岩田圭佑・永村景子、土木史研究講演集、Vol.30、pp.243-246、2010.6.
- 2) 望月真一：路面電車が街をつくる 21世紀フランスの都市づくり、鹿島出版会、2001.3.
- 3) 和田幸信：フランスの景観を読む 保全と規制の現代都市計画、鹿島出版会、2007.5.

## MAKING PROCESS OF THE LANDSCAPE PRESERVATION PLAN BY PARTICIPATION APPROACH IN FRANCE

Naoto TANAKA and Cyrille MARLIN

In Japan, social movements for preserving the mechanisms of creating peculiar local landscape with the space for change are recently being practiced. This study analyzed the meaning of participation, comparing the actions for the landscape preservation in Japan with the activities conducted by the team of Cyrille MALIN's team, "Atlas Pratique des Paysages d' Auvergne" (landscape preservation with people's daily lives) in France. The project was consigned to Dr. MALIN by the DREAL (the local government's department of regional environment and development), and there are two very unique components of the project. One is the exploration ride on "Landscape Shuttle" with local residents around the preserved area, and another is the storytelling via blogs, through which local residents share the ideas of preserving the area. Thus, the project allows people to develop local management systems from the viewpoints of landscape preservation.